

＜鳴沢岳事故背景にあるもの＞

府大山岳部と伊藤との歩み 1999 年～2009 年

文責：中西博己

はじめに

この節では府立大学山岳部員と伊藤との係わり合いのうち、1999 年頃から 2009 年の期間について述べる。その期間の中で、府立大学山岳部員と伊藤との間で変わらずにあったこと、一方で、時と共に変わっていったものの 2 点を対照として浮かび上がらせることで、伊藤と山岳部との関係、事故の背景にあるものが明瞭になるものとする。

先に結論から述べると、変わらずにあったもの、それは伊藤個人としては、黒部、立山、劔岳周辺への登山へのこだわり、対山岳部としては、山岳部員はパートナーというよりも、伊藤が難所をリードクライムで通過する場合における、難所でのビレイヤー、またはラッセル・ボッカ要員として考えていたことが挙げられる。また、夏合宿、冬合宿という山岳部主体で行う行事については参加することはなかったし、部員から伊藤を誘うことも無かった。

次に、山岳部として不変であったものとしては、伊藤との山登りは、合宿山行を意味するものではなく、山岳部員にとって技術的にランクの高い山登りへの挑戦、最終的には山岳部としての自立を目的とした、ステップアップ山行としての性格を、最後まで持ち続けた。山岳部として登山の志向としては伊藤のこだわりを持つ地域だけではなく、日本全国の山々やクラシックルート、岩登りといったさまざまな志向が見受けられた。

一方、二者の中で、時と共に変わっていったものがある。伊藤個人としては、伊藤自身の加齢、登り方の変化すなわち、岩壁・冬期ハードクライムから雪稜歩きへ、並びに初登攀する対象から研究対象としての登山への志向転換が挙げられる。山岳部としては、志向する山岳部としてのあり方が大きく分けて 3 回変化した。すなわち、山岳部としての自立を目指す時期、部として自立し、伊藤から離れ始める時期、そして他大学との共同・協調を通して部のあり方を模索する時期といったように、時と共に部としての志向性は変化していった。

不変であったことと変化したこと、その両者の歯車に徐々にずれが生じ、進行していたにもかかわらず、そのずれを修正するための決定的な解決策を両者ともに見出すことができずにいたことが、この事故の背景にあったのではないだろうか。

さて、先に述べた仮説に対する検証を以下の節で行う。手法としては論の展開の便宜上、時系列に従って、3 つの期間に分けて行う。

まず第 1 期として、伊藤にとってのハードクライム期末期と学術的登山への志向の萌芽、山岳部としては、部の自立を目指す部員増加期(1999 年から 2001 年)とする。

伊藤にとっての初登攀対象の喪失と『黒部別山-積雪期』上梓、山岳部の自立と部員数安定推移期(2002 年から 2005 年)を第 2 期とし、第 3 期は、伊藤の研究対象としての登山

の幕開け、山岳部にとっては部員数再増加期による他大学との協調路線への転換(2006年から2009年)とした。

1、第1期(1999年～2001年)における山岳部と伊藤との関わり合い

・伊藤の山岳部へのスタンス

中西が入部した1999年4月当初、伊藤は当時、京都左京勤労者山岳連盟(以下、左京労山とする)の会長であり、堀中は山岳部員兼左京労山のメンバーだった。堀中であれ中西とであれ、伊藤が参加する山岳部としての活動においては、伊藤が2000年ごろに左京労山を辞するまで、左京労山と山岳部の合同山行と銘打たれた計画書が発行されることが常であった。

伊藤の山岳部員に対するスタンスについては、当時より、伊藤にとって山岳部員はパートナーというよりはビレイヤーであり、ラッセル・ボッカ要員として考えられていた。山の対象も日本のあちこち、というわけではなく、立山黒部・劔岳周辺であり、課題としては、依然としてハードクライムである劔岳への継続登攀と冬期黒部丸山もしくは黒部別山の初登攀に絞られていた。1999年当時、伊藤は42歳である。因みに、若い部員との年齢差は20程度である。

同時期において、伊藤は登山記録に関する山岳部ホームページも充実させ、優秀な高校生登山者を指導したい、ということ語っていた。また、実際にホームページでは似たような文言がテロップで表示されていた。

ハードクライムを除く登山活動で指摘しておくべきものとしては1999年8月に実施された「黒部川右岸の藪漕ぎ～赤沢岳北西壁登攀計画」がある。これが、のちの東信道プロジェクトと変貌する。当時は東信道を探す意識はあまり無く、山岳雑誌『岳人』のとある記事を元に、黒部川右岸の藪をかきわけ、その後、赤沢岳の岩を登攀しようというものだった。実際の登山中に、猟師のものと推測される、なた目を発見し、そこから、中西が主体で冠松次郎の文献における東信道の記述をまとめてみたり、『山岳』に掲載されていた冠松次郎による古地図を探したり、黒部電源開発関係の文献を漁り始めることとなった。

これが後年の、ハードクライムから学術的登山への伊藤の登山志向転換につながる象徴的な出来事となっている。

・山岳部としての伊藤へのスタンス

慢性的かつ恒常的な部員不足や他サークルの勃興により、部室没収という話題も学務課よりちらほらあったようだが、心ある大学の職員の取り計らいにより、なんとか部室を奪われずに済んでいた状態だった。そんな状況の中で、山岳部に入部した部員にとって、山を共にする伊藤はコーチではなく「左京労山の伊藤」だった。ゆえに、互いに合宿を共にすることは意識されなかった。ただし、学生山岳部員でありながら、社会人山岳会員と行動を共にするというスタイルは、大学山岳部として特殊ケースであるという意識も各部員にあっ

た。中西個人としては当時、恵まれていると感じると同時に、同じ山岳部としてイーブンなレベルで登山をしていない、学生本位の登山活動をしていないことが多い、という意味で、他大学山岳部に対して引け目を感じていた。

一方で部員数は1999年の中西、堀中の2名から、井田、新谷、中村琢磨、山口、前川、廣田の入部により2001年4月時点で7名に膨れ上がり、当時の大学山岳部の衰退具合と比較しても、異様かつ特殊な盛り上がりを見せている。

そんな中での伊藤との山登りは先に述べたとおり、大学山岳部のレベルを暗示的に示す合宿ではなく、常にステップアップ山行であった。山行エリアは、中西とのいくつかの例外的なハードクライムを除き、ほとんどパターン化されていて、後立山の町側側のトレース済みの尾根、雄山東尾根、真砂尾根といった技術的には比較的容易なものであった。部員の意識としては、その中でポッカやラッセル、ビレイヤーをしてでも、自分たちのレベルを上げ、本来あるべき大学山岳部にする、という意識が少なからずあった。

ここまでの山岳部との伊藤との関わり合いにおいては、伊藤にとっては山岳部員との山行というものは、継続登攀のパートナー養成やそれにかかわるトレーニング要員としての捉えていたようであり、山岳部側としては、山岳部として自立するためのステップアップ山行と位置づけていた。

2、第2期(2002年～2005年)における山岳部と伊藤との関わり合い

・伊藤の山岳部へのスタンス

伊藤は2002年4月において当時45歳で、てつじん山の会のリーダーであった。山岳部へのスタンスとしては、第一期と同様で、部員はビレイヤーでありポッカ要員、登山エリアも立山・劔岳・黒部の一部のルートに限定されていた。伊藤が山岳部の主要な合宿に参加することは無かった。2002年には黒部別山オオヘツリ尾根の冬期初登攀を終え、これにより主たる黒部の冬期初登攀の対象は失われた。

これ以降、2005年発行の『黒部別山-積雪期』の上梓に向けて、伊藤は編集・執筆に専念することになり、結果として、ハードクライムは行われなくなった。事実、2002年の東大谷右尾根～劔岳の山行を最後に、長期の厳冬期登山は行われていない。

同時に、ホームページのコンテンツも内容としては特筆すべきものが無くなり、情報発信力を失っていった。

『黒部別山-積雪期』での編集・執筆作業に面して、伊藤は相当数の文献を蒐集していたようであり、これが伊藤の学術的登山へ志向転換の更なる契機になったと考えられる。但し、踏査登山である「第二次東信道プロジェクト」も中西、牛田、前川により2003年8月に遂行されたが、伊藤は参加しなかった。

・山岳部の伊藤へのスタンス

退部者が何名か居たものの、部員数は他大学山岳部と比較しても、依然として安定的に高い水準にあり、加藤、渡辺、中島が中心となって山岳部を引っ張り、5～8名を保って

いた。伊藤の執筆作業への専念、山岳部側では合宿以外の山行も山岳部メンバーだけで山登りを行うことが通常になってきたことも相俟って、第一期のように特定の部員が頻繁に伊藤と登山をすることは減少した。それでもやはり、時折行われる伊藤との登山の位置づけはステップアップ山行であり、登山対象となるエリアやルート、難易度に変化は無かった。部員の伊藤との登山は特殊で、本来の大学山岳部の姿ではないという意識は第一期と同じである。

第二期における伊藤と山岳部との関係を第一期とそれと比較すると、山岳部としては部としての歯車が廻り始めたため、部での山行重視、一方、伊藤は『黒部別山－積雪期』の上梓のための執筆活動への専心により、山岳部員との山行レベル上での関係が薄れてきている。こういった契機により、第3期での山岳部部員の他大学との共同・協調路線への転換、登る対象としての山から研究対象としての山への伊藤の志向転換へ向かうこととなる。

3、第3期(2006年～2009年)における山岳部と伊藤との関わり合い

・伊藤の山岳部へのスタンス

2006年4月当時、伊藤は48歳。てつじん山の会のリーダーである。若い部員との年齢差は30にまで広がった。2008年5月には、伊藤の加齢による体力低下を同行した山岳部員より指摘されている。完全に山行スタイルは積雪期では尾根歩きへ変貌し、ハードクライムのスタイルは失われた。

山岳部員と山を共にする回数は安定的に少なかったものの、依然として伊藤にとって山岳部部員は無雪期、積雪期を問わず、ビレイヤーでありボッカ要員、登山エリアも立山・剣岳・黒部という点は変わらない。また、ホームページは第2期と同様、継続登攀やハードクライムで彩られることは無く、その役目を終えたかのように、閑散としたものであった。

一方、踏査登山である「第3次東信道プロジェクト」が2006年10月に伊藤、中西、渡辺で行われ、当プロジェクトは完了した。2007年2月には、大正時代のカモシカ猟師の足取りを意識した、後立山右岸を縦断する山行を渡辺と行い、2008年11月には日本山岳文化学会の研究発表大会でセッション発表『後立山連峰の積雪期登山史とカモシカ猟師』という講演をしている。このことから、伊藤が登山のスタイルをハードクライムから、完全に学術の対象へと志向転換させたことが判る。

・山岳部の伊藤へのスタンス

部員数のみに注目するならば、依然として安定的に高い水準にあり、2009年4月においては過去最高水準を誇り、9名となっている。2009年4月当時では、藤井、安西、竹中で山岳部を引っ張っている状況であった。第2期と同様、伊藤との登山回数は安定的に低いものであった。第2期と第3期を比較した場合における大きな違いとしては、他大学との合同登山の回数の増加が挙げられる。特に藤井や安西を中心に関西の他大学との合同登山、共同山行が数多く企画、実行されたことは象徴的である。

だが、伊藤と山岳部との山行が無くなったわけではなかった。伊藤の加齢による体力低下が指摘される中、伊藤自身の登山回数が減少していたにもかかわらず、山岳部としての伊藤との山登りやエリアや難易度は過去と同様であり、山岳部員にとっては依然としてステップアップとしての意味合いであることには変わりなかった。

第3期において、伊藤側ではハードクライムを止め、学術的対象として登山を志向し、山岳部側では伊藤との登山をステップアップの重心に置かず、他大学との協調・共同路線によるステップアップを志向している傾向にあったといえる。

おわりに

ここまで、伊藤と山岳部との関わりを3つの時期に分けて、お互いに一貫していたものと、お互いに变化したものを指摘した。事故背景にあったもの、それは山岳部にせよ、伊藤にせよ、同じ山を登り、同じ目標を共に分かち合うパートナーというより、お互いの目的を達成するために利用する対象であり続けた、という点に集約されるのではないだろうか。この点を、鳴沢岳登山と重ね合わせて見れば、山岳部と伊藤との間の、お互いの登山技術や経験に即した目線あわせへの努力及び仲間としての話し合いの欠如が、暗に浮かび上がると思われる。

以上

<別添> 山岳部員数の推移 1998年から2009年4月まで(途中退部者を含む)

期間	年度											
	第1期				第2期				第3期			
在部者名	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009
堀中			●									
中西		●	●	●	●	●	●					
廣田				●	●	●	●					
井田			●	●	●	●	●					
新谷			●	●	●	●	●					
中村琢			●	●	●	●	●					
(山口)				●	●	●	●					
(秀高)					●	●	●					
(木村)					●	●	●					
前川				●	●	●	●					
加藤						●	●	●	●	●	●	
渡辺						●	●	●	●	●	●	
木林						●	●	●	●	●	●	
嘉門						●	●	●	●	●	●	
中島								●	●	●	●	●
藤井									●	●	●	●
菊澤									●	●	●	●
安西										●	●	●
櫻井(※)										●	●	●
竹中											●	●
藪内											●	●
横山											●	●
河村												●
中村俊												●
部員数	2	2	4	7	8	8	5	6	6	5	8	9

<注>

- ・カウント方法としては4月1日時点とした
- ・※ 嘉門、櫻井については入部時期がはっきりしない
- ・○ 括弧内の部員については途中退部者

